

## 【球面調和関数と球ベッセル関数による展開】

## 1 球面調和関数による多重極展開

静電ポテンシャル

$$\phi(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \int \frac{\rho(\mathbf{R})}{|\mathbf{r} - \mathbf{R}|} d^3\mathbf{R} \quad (1)$$

は  $\mathbf{R}$  と  $\mathbf{r}$  のなす角を  $\chi$  とすると  $|\mathbf{r} - \mathbf{R}|^2 = r^2 - 2Rr \cos \chi + R^2$  で、ルジャンドルの多項式  $P_n(x)$  を用いると

$$\frac{1}{|\mathbf{r} - \mathbf{R}|} = \frac{1}{r} \sum_{n=0}^{\infty} P_n(\cos \chi) \left(\frac{R}{r}\right)^n \quad (r > R) \quad (2)$$

となり、更に、 $\mathbf{R}$  と  $\mathbf{r}$  を球座標で  $(R, \Theta, \Phi)$  と  $(r, \theta, \varphi)$  で表すと、 $\cos \chi = \cos \theta \cos \Theta + \sin \theta \sin \Theta \cos(\varphi - \Phi)$  であるから、球面調和関数  $Y_n^m$  の加法公式、

$$P_n(\cos \chi) = \frac{4\pi}{2n+1} \sum_{m=-n}^n Y_n^m(\theta, \varphi) Y_n^m(\Theta, \Phi)^* \quad (3)$$

を用いて、

$$\phi(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=-n}^n \frac{q_m^{(n)}}{r^{n+1}} \sqrt{\frac{4\pi}{2n+1}} Y_n^m(\theta, \varphi) \quad (4)$$

$$q_m^{(n)} = \sqrt{\frac{4\pi}{2n+1}} \int \rho(R, \Theta, \Phi) R^n Y_n^{m*}(\Theta, \Phi) R^2 \sin \Theta dR d\Theta d\Phi \quad (5)$$

が得られる。この  $q_m^{(n)}$  は、電気  $2^n$  重極モーメントを表す。そして、 $n=0$  は全電荷、 $n=1$  は双極子モーメント、 $n=2$  は4重極モーメントになる。これらは、直交座標を用いて展開したときのモーメントに相当している。このような展開は、直交座標を用いるよりも系統的な計算ができる。また、ラプラス・ポアソン方程式を直接、球座標で、変数分離して解く場合には、必然的にこのような計算に帰着される。

## 2 ルジャンドル多項式と球面調和関数

 $n$  次のルジャンドル多項式  $P_n(x)$  は、ロドリゲスの公式で

$$P_n(x) = \frac{1}{2^n n!} \frac{d^n}{dx^n} (x^2 - 1)^n \quad (6)$$

で与えられ、

$$\frac{1}{\sqrt{1-2tx+t^2}} = \sum_{n=0}^{\infty} P_n(x) t^n \quad (|t| < 1) \quad (7)$$

のような母関数展開が可能である。そして、この多項式には、随伴関数があり、

$$P_n^m(x) = (1-x^2)^{m/2} \frac{d^m P_n(x)}{dx^m} \quad (|m| \leq n) \quad (8)$$

があり、

$$\frac{d}{dx} \left[ (1-x^2) \frac{dP_n^m(x)}{dx} \right] - \left[ \frac{m^2}{1-x^2} - n(n+1) \right] P_n^m(x) = 0 \quad (9)$$

の解である ( $m = 0$  の場合、ルジャンドルの微分方程式となる)。  $m < 0$  の場合の定義は、式 (6) を用いれば意味が明白となるだろう [2]。また、

$$\int_{-1}^1 P_n^m(x) P_k^m(x) dx = \frac{2}{2n+1} \frac{(n+m)!}{(n-m)!} \delta_{nk} \quad (10)$$

という直交関係を持つ。ラプラス演算子は

$$\Delta = \frac{1}{r} \frac{\partial^2}{\partial r^2} (r^2) + \frac{1}{r^2} \Delta_\Omega \quad (11)$$

$$\Delta_\Omega = \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left( \sin \theta \frac{\partial}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \quad (12)$$

と書くことができるが、角度部分の演算子に対して、

$$\Delta_\Omega P_n^m(\cos \theta) e^{im\varphi} = -n(n+1) P_n^m(\cos \theta) e^{im\varphi} \quad (13)$$

が成り立つ。そこで、球面調和関数を

$$Y_n^m(\theta, \varphi) = (-1)^m \sqrt{\frac{2n+1}{4\pi} \frac{(n-m)!}{(n+m)!}} P_n^m(\cos \theta) e^{im\varphi} \quad (14)$$

と定義すると

$$\int_0^\pi \sin \theta d\theta \int_0^{2\pi} d\varphi Y_n^m(\theta, \varphi) Y_{n'}^{m'*}(\theta, \varphi) = \delta_{nn'} \delta_{mm'} \quad (15)$$

という正規直交関係を得ることができる。量子力学では、角運動量の 2 乗の演算子  $\hat{\ell}^2$  と  $z$  成分の演算子は

$$\hat{\ell}^2 = -\hbar^2 \Delta_\Omega \quad (16)$$

$$\hat{\ell}_z = \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial \varphi} \quad (17)$$

となるので、球面調和関数は、この 2 つの演算子の同時固有状態である。すなわち

$$\hat{\ell}^2 Y_l^m = \hbar^2 l(l+1) Y_l^m \quad (18)$$

$$\hat{\ell}_z Y_l^m = \hbar m Y_l^m \quad (19)$$

を満たす。

### 3 球ベッセル関数による展開

球座標でヘルムホルツ方程式を解く場合に

$$\psi(r, \theta, \varphi) = U(r) Y_l^m(\theta, \varphi) \quad (20)$$

とおくと、

$$\frac{1}{r} \frac{d^2(rU)}{dr^2} + \left[ k^2 - \frac{n(n+1)}{r^2} \right] U = 0 \quad (21)$$

という方程式が得られる。  $x = kr$  とおけば、

$$\frac{1}{x} \frac{d^2(xU)}{dx^2} + \left[ 1 - \frac{n(n+1)}{x^2} \right] U = 0 \quad (22)$$

となる。この解を球ベッセル関数という。球ベッセル関数には独立な解が2つあり、

$$j_n(x) = (-1)^n x^n \left( \frac{1}{x} \frac{d}{dx} \right)^n \frac{\sin x}{x} \quad (23)$$

$$n_n(x) = -(-1)^n x^n \left( \frac{1}{x} \frac{d}{dx} \right)^n \frac{\cos x}{x} \quad (24)$$

と表される。また、別の解もあり、これは球ハンケル関数と呼ばれ、

$$h_n^{(1)}(x) = -i(-1)^n x^n \left( \frac{1}{x} \frac{d}{dx} \right)^n \frac{e^{ix}}{x} \quad (25)$$

$$h_n^{(2)}(x) = i(-1)^n x^n \left( \frac{1}{x} \frac{d}{dx} \right)^n \frac{e^{-ix}}{x} \quad (26)$$

$$(27)$$

となる。こちらの方は、球面波が広がるか収束するかどちらか一方の波を表す。そして、ヘルベクトルに対する

$$\mathbf{\Pi}_\omega(\mathbf{r}, t) = \frac{e^{i\omega t}}{4\pi\epsilon_0} \int \tilde{\mathbf{P}}_\omega(\mathbf{R}) \frac{e^{-ik|\mathbf{r}-\mathbf{R}|}}{|\mathbf{r}-\mathbf{R}|} d^3\mathbf{R} \quad (28)$$

という式は、0次の第2種球ハンケル関数の

$$\frac{e^{-ik|\mathbf{r}-\mathbf{R}|}}{|\mathbf{r}-\mathbf{R}|} = -ik \sum_{n=0}^{\infty} (2n+1) P_n(\cos \chi) h_n^{(2)}(kr) j_n(kR) \quad (r > R) \quad (29)$$

という展開公式を用いると、

$$\mathbf{\Pi}_\omega(\mathbf{r}, t) = \sum_{n=0}^{\infty} \mathbf{\Pi}_\omega^{(n)}(\mathbf{r}, t) \quad (30)$$

$$\mathbf{\Pi}_\omega^{(n)}(\mathbf{r}, t) = -ik \frac{e^{i\omega t}}{4\pi\epsilon_0} (2n+1) h_n^{(2)}(kr) \int j_n(kR) P_n(\cos \chi) \tilde{\mathbf{P}}_\omega(\mathbf{R}) d^3\mathbf{R} \quad (31)$$

と書くことができる。 $kR \ll 1$ として、

$$j_n(kR) \sim \frac{2^n n!}{(2n+1)!} (kR)^n \quad (32)$$

という近似式を使うと

$$\mathbf{\Pi}_\omega^{(n)}(\mathbf{r}, t) \approx -i \frac{e^{i\omega t}}{4\pi\epsilon_0} k^{n+1} h_n^{(2)}(kr) \frac{2^n n!}{(2n)!} \int R^n P_n(\cos \chi) \tilde{\mathbf{P}}_\omega(\mathbf{R}) d^3\mathbf{R} \quad (33)$$

で表される。 $n=0$ の場合は、 $P_0(\cos \chi) = 1$  かつ  $h_0^{(2)}(x) = ie^{-ix}/x$ 、 $n=1$ では、 $P_1(\cos \chi) = \cos \chi$  かつ  $h_1^{(2)}(x) = i(1+ix)e^{-ix}/x^2$  なので、 $kr$ の冪級数展開と一致する。しかし、この次の項は一致しない。すなわち、式(32)の近似が不十分となるためである。その時は、式(31)に戻って計算しないといけない。

## 参考文献

- [1] 平川浩正：「電気力学」(培風館、1973年)。
- [2] ジョージ・アルフケン著、権平健一郎、神原武志、小川直人訳：基礎物理数学3「特殊関数と積分方程式」(講談社、1978年)。